

未来

単なる産地から「川根茶の里」へ

お茶の入れ方教室に参加した子から届いた手紙

「9/1にきてくれてありがとうございました。おかげで、おいしいお茶の入れ方がわかりました。おじいちゃん、おばあちゃんがよくお茶を飲むので、おしえてあげたいです。いろいろなしゅるいのお茶を入れにいくとき、すくなくいれちゃって「もうちょっとだよ」っておしえてもらってうれしかったです。ときどきお茶をのんでいるんだけど、はじめてあんなおいしいお茶をのみました。ひろきさんは、いつもお茶をのんでいますか？（ひろきさん=担当講師）ビデオをみたら、まいにちお茶をのんだらいいとっていたので、こんどからまいにちお茶をのみます。ほんとうにありがとうございました。」

この地域の子どもたちにもっと川根茶に親しんでもらおうと「お茶の入れ方教室」を毎年開いている川根茶業青年団。団長の諸田環さんに、教室の狙いや川根茶に対する思いなどを聞いた。

最近、ティーバックなどの手軽で便利なお茶が増え、家でお茶を入れる機会が少なくなってきたと思います。このお茶の産地である川根本町も例外ではありません。

このため、川根茶業青年団では、毎年「お茶の入れ方教室」を開き、子どもたちにお茶の種類や、おいしい入れ方

「お茶は人と人をつなぐ大切な飲み物」と言った人がいる。

この町に住むすべての住民が、そんな気持ちを持って川根茶と共に、未来へと歩んでいけたら。わたしたち一人一人が川根茶を理解することから始めよう。川根茶を生かした「まちづくり」の形を考えてみる。



(川根茶業青年団は、川根茶業協同組合の一組織)

川根茶業青年団 諸田環 団長

Morota Kan 金正園専務
川根茶業青年団団長として活動するほか、川根本町ジュニアバレーボールチームの監督として児童の健全育成に取り組んでいる。

小さいうちから川根茶のすばらしさに触れてほしい親しみを感じてほしい自分たちが生まれ育った町だから

わたしもずっとお茶に囲まれて生活してきました。毎年新茶の季節を迎えると、お茶摘みさんが茶園に繰り出す姿を見かけたり、茶工場からは新茶の良い香りが漂ってきたりしました。どこからともなく茶刈り機の音が聞こえてくると、ああ、もうそんな季節なんだなあと思えたもので。この町は、川根茶を五感で感じる事ができる。それによって季節を感じることが出来る町なんです。今の子どもにもそういうところに気づいてほしいですね。

教室に参加した子がわたしたちに話してくれました。

「この間、わたしが家族にお茶を入れてあげたんだよ。みんな、とても喜んでくれたよ」と。とてもうれしく思ったのを覚えています。この子どもたちが成長し大人になったとき、お茶に携わる仕事に就いてくれたらそれが一番の理想ですが、お茶との関わり方というものは、それだけではないと思うんです。一人一人の子が自

分なりに、川根茶とどう関わっていくかということを考えていくべきではないかと思えます。ここに生まれ育った子どもたちには、川根茶に親しみをもち、誇りに感じてほしい。そんな心で健やかに成長してくれば、きっとこの町の未来も明るいのではないかと思えます。

わたしたち作り手や売り手暮らす皆さんが、川根茶は日本一のお茶なんだという誇りを持って欲しい。この地域にしか存在しない大切なお茶なんです。

この町に住むわたしたち全員が川根茶を守り支えるような町にしたい。川根茶は、こ

お茶の入れ方教室
川根茶産地の小・中学校を対象として、年1回実施する「川根茶」に親しんでもらうための体験教室。始めてから10余年が経過。子どもたちに、生まれ育った町に誇りや愛情を抱いてほしいと川根茶業青年団が主体となって開いている。現在実施していない学校についても、希望があれば順次開催していく意向。

の町の暮らしに根付いた「一つの文化」なんですから。川根茶が持つ可能性を、これから皆さんと一緒に考えていけたらと思っています。



お茶の入れ方教室 中央小学校にて